

薬剤管理指導料の算定件数 7.5 倍、職員に主体性と院内の改善風土醸成も

日本病院会が1月22日に開催した「JHAstis（ジャスティス）」の勉強会で、加納岩総合病院（山梨市、160床：一般120床、地域包括ケア40床）の鶴田信一氏（事務部システム課課長兼医事課課長）が講演。薬剤管理指導料の算定件数が7.5倍へ大幅上昇した事例などを紹介しました。



加納岩総合病院の鶴田信一氏（事務部システム課課長兼医事課課長）

加納岩総合病院では定期的に各種レポートを院長、副院長、各部門長が回覧しています。鶴田氏は、JHAstisについて「各経営指標が見やすく、理解しやすくまとめられている。ベンチマーク分析の結果で他病院と比較した上で自病院の現状を把握できる。加算算定に関する留意点や対策もまとめられているため非常に有益」と評価しました。

院内での活用（月次・定期レポート）

- 月次、定期レポートはコメントを記載して、各部長・副院長・院長に回覧
（加算レポートは関連する部署の所属長へ）

JHAstisの利点

- 各経営指標がまとめられているので、見やすく、理解しやすい
- 加算・定期レポートはベンチマークがあり、自院の立ち位置が見える化できる

ベンチマーク分析の結果、加算算定において改善の余地が大きかったのは薬剤課、栄養給食課、リハビリテーション課であることが判明。それぞれ JHAstis を活用しつつ、改善活動を行いました。

薬剤課は、ベンチマーク分析結果を基準に、薬剤管理指導料の算定件数の数値目標を週 25

件に設定。目標達成に向けた対策を関係部署間で協議し、薬剤管理指導料の算定漏れ防止の施策を進めました。例えば、入院診療計画書へ「入院薬剤管理指導依頼」の項目を追加し、全患者を対象とすることで、薬剤師が能動的に関与できる環境を整えました。院内医薬品情報の共有化などチーム医療強化へ向けての取り組みなども進めました。

薬剤課の取り組み（薬剤管理指導料）

1. 対象患者増加策

入院診療計画書へ「入院薬剤管理指導依頼」の項目を追加、全患者を対象とする事で薬剤師が能動的に関与できる
(患者選定を薬剤師から医師主導に変更し、提案にかかる時間の短縮と対象患者の増加に繋がる)

2. 情報把握にかかる時間の短縮

電子カルテでの患者情報把握
(病棟への移動時間削減)

薬剤課の取り組み（薬剤管理指導料）

3. 数値目標の設定（週25件）

※他院とのベンチマークをもとに設定

4. チーム医療への意識強化

がん化学療法レジメン管理、副作用モニタリング、院内医薬品情報の配信と共有化、抗菌薬の血中濃度解析や糖尿病患者への自己注射指導

↓

チーム医療の取り組み強化

↓

薬剤管理指導への意識向上

結果、2017年度は前年度と比較して、薬剤管理指導料の月間平均件数は7.5倍の150件。2018年度も引き続き高水準を維持しています。

栄養給食課は、入院栄養食事指導料の算定件数増加に向けた取り組みを実施。管理栄養士が1人1月あたりの目標を設定した上で、医師、看護師、医事課の多職種連携などを推進しました。

栄養給食課の取り組み（栄養指導）

件数増加を実現できた大きな要因は

① 医師

栄養士からの指示継続提案を検討承認
（電子カルテの付箋機能を活用）
伝達内容より栄養指導指示を検討
→医師・管理栄養士共に時間の短縮

② 管理栄養士

1人1月あたりの目標設定
・院内の目標発表会(年度初め)
・個々で実数把握

③ 看護師・医事課など多職種が協力

結果、2016年に毎月20件程度だった入院栄養食事指導料は現在、60件程度と3倍にまで上昇しています。

リハビリテーション課は、退院時リハビリテーション指導料、リハビリテーション総合計画評価料をターゲットに設定。無駄な時間の削減、課内への問題提起などを実施しました。

リハビリテーション課の取り組み

（退院時指導、総合実施計画書、一人当たりリハビリ算定件数）

1. 無駄な時間の削減

- （1）カンファレンス時間の見直し
- （2）朝のウォーキングカンファレンスへの参加人数見直し
- （3）算定に迷わないようにアルゴリズム式フレームを作成

2. 課内への問題提起

- （1）声掛け、意識づけを行う
- （2）課員とのコミュニケーションの中から問題点を抽出し
改善活動を行う

結果、退院時リハビリテーション指導料、リハビリテーション総合計画評価料、療法士一人当たりのリハビリ売り上げのいずれも順調な伸びを示しています。

さらには、薬剤師などから医師へ算定件数をさらに増加させるため積極的な提案がされるようになり、「院内に経営改善の風土が根付いてきた」（鶴田氏）とのことです。

加納岩総合病院の取り組みまとめ

1. JHAstisによる自院の算定状況把握と目標値設定

2. 算定増に向けて各部署取り組み

3. 全体会議で毎月の算定実績を発表

※副産物としてチーム医療に関わる意識変化もおこった
(今まで、医師の指示を待って行っていたが、患者の病態等を把握し、積極的に提案できるようになった)